

論文

アジア育成年代サッカーの実態調査
 -ブルネイ王国 U-15 アカデミッククラブ選手に着目して-

松山博明
追手門学院大学

松井健
追手門学院大学

馬込卓弥
追手門学院大学
大阪大学

辰本頼弘
追手門学院大学

巽樹理
追手門学院大学

須田芳正
慶應義塾大学

福士徳文
慶應義塾大学

Survey on Current Asian Youth Soccer
 -Focusing on the U-15 Football Academy Club Players in Brunei-

Hiroaki MATSUYAMA
Otemon Gakuin University

Takeshi MATSUI
Otemon Gakuin University

Takuya MAGOME
Otemon Gakuin University
Osaka University

Yoshihiro TATSUMOTO
Otemon Gakuin University

Juri TATSUMI
Otemon Gakuin University

Yoshimasa SUDA
Keio University

Norifumi FUKUSHI
Keio University

Abstract

The current performance level of youth football players in Brunei was surveyed, and a pilot study was conducted to explore their goals and motivations for soccer. The results indicated that most young players started soccer through their intrinsic motivation, resulting from playing soccer daily at school. Moreover, they had many opportunities to train in football clubs, schools, and national facilities. They have an excellent environment for soccer and other sports and supposedly enjoy training. Most of the players strongly desired to become professional football players in the future and play in countries with better football standards than Brunei. League games are well organized, and young players can often watch games, which might increase their interest in soccer. The JFA coaching policies decide the frequency and the length of training. It is suggested that the Brunei Football Association publish general administrative and personnel concepts and prospects for soccer, design long-term projects based on this concept, identify the future course, and encourage each stakeholder to play an active role, and execute the plan.

キーワード:

Keywords : Asia, Youth Soccer, U-15, Brunei

I. はじめに

ブルネイ・ダルサラーム国 (Negara Brunei Darussalam 以下:ブルネイとする)は、南シナ海やマレーシアと国境を接する国である。人口の97%がより大きな西部に、東の山岳部には約1万人が住んでおり、首都はバンダルスリブガワンである。ブルネイ政府は、社会的調和と経済成長においても開発のためのスポーツの重要性を支持し、健康的な生活習慣の推進や目標達成に向けて、文化・青年・スポーツ省、教育省、健康と開発省だけでなく、民間セクターが互いに協力し活動している(独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017)。また、国のスポーツ政策は、生涯スポーツと競技力向上に分けられる。生涯スポーツは、全ての年代層に身体活動への参加を奨励するもので、競技力の高いスポーツはエリートスポーツの発展に寄与している。国民のスポーツ実施率等統計(性別、年代別)から見ると、ブルネイにおける最も人気のスポーツはサッカーである(独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017)。ナショナルチームは99年のマレーシアカップで優勝している。しかしながら、現在の2020年4月9日に発表された最新の国際サッカー連盟(Fédération Internationale de Football Association:以下FIFAとする)ランキングでは、191位で前回発表時と順位は変わらない。また、ブルネイ代表はアジアサッカー連盟(Asian Football confederation:以下AFCとする)に加盟しており、AFC内で42位である(FIFAランキング、online)。日本とブルネイとの交流があった2011年度ブルネイサッカー派遣事業報告書によると、サッカーを通じたプログラムで感じたことは3点あり、1つ目は、純粋にサッカーが上手になりたいと感じている選手が存在すること、2つ目は、サッカーをとりまくステークホルダー(行政、協会、現場)にビジョンや意欲のバラつきが大きい点、3つ目は、競争意識又はハンタリー精神やサクセスへの欲求の欠如であると報告されている(21世紀東アジア青少年大交流計画、2011)。また、2015年から4年間、公益財団法人日本サッカー協会(Japan Football Association:以下JFAとする)海外派遣サッカー指導者のブルネイ育成年代代表監督であった藤原孝雄氏(以下:藤原監督とする)は、選手や親にとって、サッカーは「競技」としての理解がまだ少ないのが現状であると述べている(JFA公認指導者の海外派遣、online)。このように、ブルネイ代表のランキング順位の向上は、国民のサッカー文化が根付くまでは時間がかかると思われる。また、現在のブルネイ代表サッカーのレベルも決して高い

レベルに達していると思わない。これまで、ブルネイサッカーに関する先行研究は、こうした財団法人日本国際協力センター(JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER:以下:JICEとする)報告書やJFAでの刊行物で紹介されるだけに留まり、実際のサッカーの現状を調査した事例はほとんど見当たらないのが現状である。そこで、本研究では、全国レベルであるブルネイサッカーアカデミークラブ選手の競技力に関する実態調査を行い、サッカーに対する志向や目標などを探索する基礎的研究を実施することを目的とした。

2. 研究方法

2.1. 調査内容

研究者本人がブルネイ・首都バンダルスリブガワン市に出向き、調査の目的などを簡潔に説明し、アンケート調査を行った。

2.2. 調査項目

松山ら(2020)の育成年代の競技力向上に関する実態調査尺度の質問紙7項目を設定した。質問項目の内容及び回答は以下の通りである。

(1) サッカーを始めた動機

(①両親にすすめられて②先生やコーチにすすめられて③兄弟や友達がしていたから④サッカーが楽しそうだから⑤サッカー選手達がかっこいいから)。

(2) チーム以外でのトレーニング(1週間)

(①いつもよくしている②よくしている③時々している④あまりしない)。

(3) トレーニングの楽しさ

(①いつも楽しい②楽しくないときもある③時々、楽しい④あまり楽しくない)。

(4) サッカーにおける目標

(①海外のプロサッカー選手になる②国内クラブのサッカー選手になる③リーグ戦トーナメントで優勝する④チームでレギュラーになる⑤友達と仲良くサッカーができればいい⑥その他)。

(5) サッカーの観戦

(①よく競技場へ観に行く②TVの試合はよく観る③時々TVの試合を観る④ほとんど観ない)。

(6) トレーニング回数(週)

(①1回②2回③3回④4回⑤5回⑥6回⑦7回)。

(7) トレーニング時間 (1回)
 (① 30分② 45分③ 60分④ 75分⑤ 90分⑥ 105分⑦ 120分
 以上)。

2.3. 調査対象

ブルネイ・首都バンドルスリブガワン市を拠点して活動している全国大会上位のアカデミークラブ平均 13.60 歳の育成年代男子選手 (12 ~ 15 歳) 合計 20 名を対象とした。

2.4. 調査期間

2020 年 2 月 21 日の計 1 日間実施した。

2.5. 統計処理

全ての統計には IBM SPSS Statistics 21 を使用し、記述統計の度数分布を行った。

3. 結果

3.1. サッカーを始めた動機

サッカーを始めた動機に関する結果を図 1 に示した。

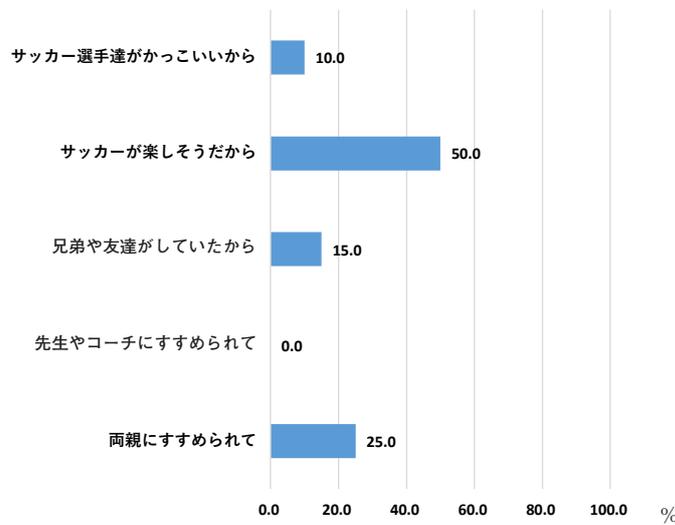


図 1. サッカーを始めた動機

3.2. チーム以外でのトレーニング回数

チーム以外でのトレーニング回数に関する結果を図 2 に

示した。

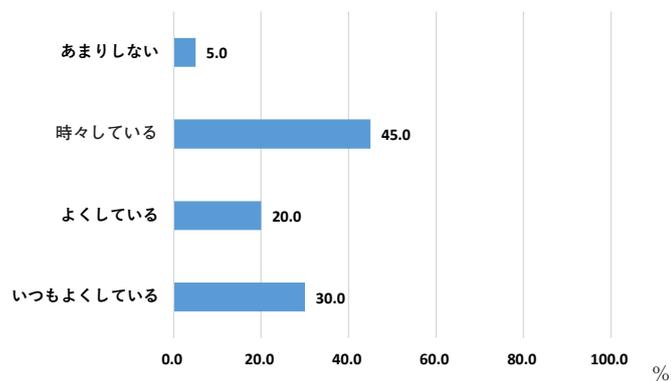


図 2. チーム以外でのトレーニング回数

3.3. トレーニングの楽しさ

トレーニングに対する楽しさに関する結果を図3に示した。

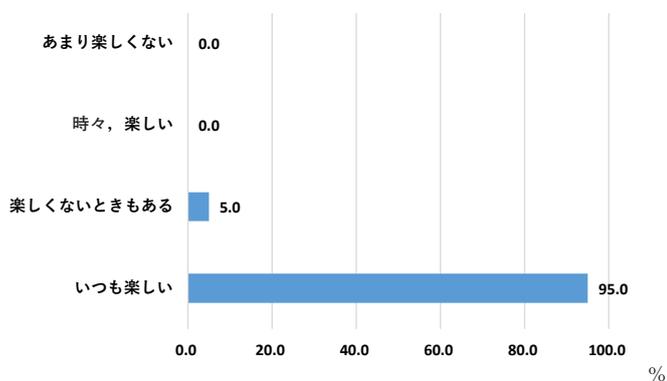


図3. トレーニングの楽しさ

3.4. サッカーにおける目標

サッカーにおける目標に関する結果を図4に示した。

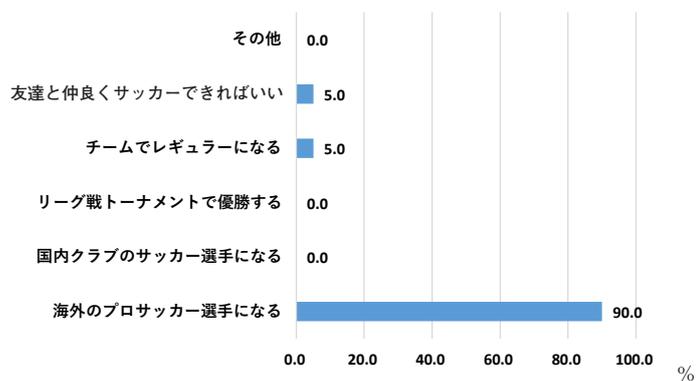


図4. サッカーにおける目標

3.5. サッカーの観戦

サッカーの観戦に関する結果を図5に示した。

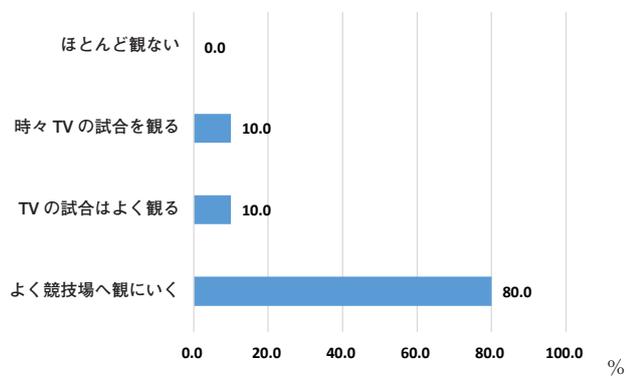


図5. サッカーの観戦

3.6. トレーニング回数

トレーニング回数に関する結果を図6に示した。

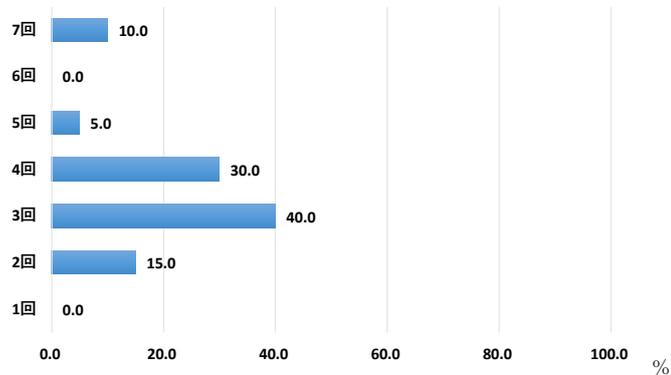


図6. トレーニング回数 (週)

3.7. トレーニング時間

トレーニング時間に関する結果を図7に示した。

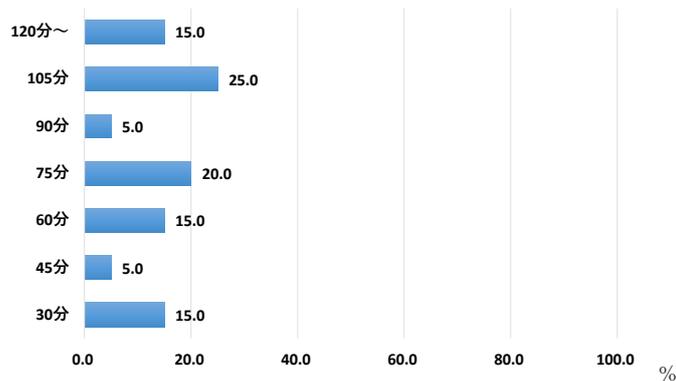


図7. トレーニング時間 (1回)

4. 考察

松山ら (2017) の項目尺度を基に各項目での「いつもよく」「よく」や50%以上の数値を「肯定派」とした。各項目での「時々」「あまり」や50%に満たない数値を「否定派」として定義し、それぞれの項目の考察を行った。

4.1. サッカーを始めた動機

サッカーを始めた動機に関しては、50.0%以上が「サッカーが楽しそうだから」という内発的動機付けによってサッカーを始めたと考えられる。国民のスポーツ実施率等統計 (性別、年代別) の報告によるとナショナルチームは1999年のマレーシアカップで優勝していることもあり、ブルネイにおける最も人気のスポーツはサッカーである (独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017)。また、ブ

ルネイの学校では文武両道、クラブ活動も盛んである。最近では、校舎は小さく、陸地にある学校のように広いサッカー場もないが、サッカーは地域のトーナメントで優勝したと述べている (外務省、online)。また、ブルネイサッカー派遣事業に参加した指導者によると、ブルネイの少年の第一印象は、とても純粋な顔つきをしているということであった。クリニックをしている時の少年たちの目は日本ではなかなか見ることができないような輝きを放っていた。また、勉強熱心で向上心がある国民性であると報告されている (21世紀東アジア青少年大交流計画、2011)。このことから、サッカーを始めた動機に関しては、大半の選手が普段通学している学校でサッカーを行っていることがわかった。また、ブルネイの選手は、「楽しそうだから」という内発的動機付けによってサッカーを始め、勉強熱心で

向上心があると考えられる。

4.2. チーム以外でのトレーニング回数

チーム以外でのトレーニング回数に関しては、45.0%が「時々している」であった。また、30.0%が「いつもよくしている」、続く20.0%が「よくしている」と回答していた。このことから、選手の半数がチーム以外でのトレーニングを行っていることが分かった。ブルネイの選手は、学校で普段からトレーニング以外でも駐車場でサッカーをしたり、友達とおしゃべりをしたり、女子は家事の手伝いをしたり、妹や弟の面倒をみたりする（外務省、online）。スポーツ推進事業の国の事業として、若者から年配の市民の参加を促すために、人口の集中する地域では少なくとも2キロに1つはスポーツの出来る施設を設けている。2014年現在673件のスポーツ施設を保有しており、その内訳はサッカーコートが140件である（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017）。このことから、ブルネイの選手は、学校や国の施設などで普段からクラブのトレーニング以外でもトレーニングする機会があることがわかった。

4.3. トレーニングの楽しさ

トレーニングの楽しさに関しては、95.0%が「いつも楽しい」と回答している。また、続く5.0%が「楽しくない時もある」と回答していた。その背景にブルネイ政府は、以前から社会的調和と経済成長においても開発のためのスポーツの重要性を支持している。また、国際競技力向上施策として、スポーツ医科学サポート-カウンセリング、リハビリテーション、スポーツ心理学、コンディショニング強化、中央キャンプ、ウォーミングアップ、対外試合、アスリート育成、アスリートの褒賞制度を実施している（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017）。このようにブルネイ政府がスポーツの重要性を支持し、純粋にサッカーが楽しい、上手くなりたいと感じている選手が存在していることは、ブルネイサッカー界にとって希望である。しかしながら、選手の「上手くなりたい」と、現場側の「なぜ上手くなる必要があるのか」に、目的に対するギャップが存在し、その「Why」を埋める「希望」を子供達に示すシステムと共に、それを実現しうる計画を必要とする（21世紀東アジア青少年大交流計画、2011）。このことから、ブルネイ人にとって、サッカーだけでなくスポーツを実施する環境には非常に恵まれているため「楽しんで実施している」と実感していると考えられる。また、一方で、純粋

にサッカーが楽しい、上手くなりたいと感じている選手に対して、「希望」を子供達に示すシステムと共に、それを実現しうる計画が必要であると考えられる。

4.4. サッカーにおける目標

サッカーにおける目標に関しては、上のレベルを目指したいという競技スポーツとしての選手での回答になった。「海外のプロサッカー選手になりたい」は、90.0%であり、続く「友達と仲良くしたい」「チームでレギュラーになりたい」については、それぞれ僅か5.0%となった。所属しているクラブは、全国大会レベルであり、各年代の育成年代代表チームに選出される選手も存在している。しかしながら、ブルネイのサッカー事情では、レベルの高いチームとのマッチメイクが難しい。そのうえ、普段海外の同世代の選手達と比較する機会がない。海外のプロサッカー選手になりたい理由は、海外選手の方が、ブルネイの選手に比べて技術が高く、スピードも速いため、世界に多くの素晴らしい選手がいると理解しているためだと考えられる（JFA ニュース、online）。それに加えて、藤原監督によるとアカデミー選手たちは、プレミアリーグが放映されている。そのため、あこがれの選手は、日本人ではマンチェスターユナイテッドに所属していた香川真司選手を注目していると述べている（JFA 公認指導者の海外派遣、online）。普段の生活の中で、身近に他国のサッカーに触れることもあり、海外のプロサッカー選手を意識していると考えられる。しかしながら、サッカーをとりまくステークホルダーにおいて、ビジョンや意欲にバラつきが大きいと報告されている。サッカー界の発展を考えるうえで重要な要素の一つが、短・中・長期のビジョンである。ビジョンが具体的な構想を作り出し、サッカーに携わる各ステークホルダーが目的や目標に向かって動き出す。しかし、TOPからの一貫した構想が具体化されておらず、それが現場において様々な問題を引き起こしていると考えられる（21世紀東アジア青少年大交流計画、2011）。こうした状況を踏まえると、サッカーをとりまくステークホルダーにおいて、ビジョンや意欲にバラつきが大きいブルネイより、他国でプレーしたいと考えている選手も少なくないと考えられる。このことから、所属しているクラブは、全国大会レベルであり、各年代の代表選手として海外試合経験も数多く存在している。そのため、自国よりも、もっとレベルの高い国でプレーしたいという気持ちが強くあると考えられる。

4.5. サッカーの観戦

サッカーの観戦に関しては、80.0%が「よく競技場に行く」であった。「よくTVを観戦する」「時々TVを観戦する」は僅か5.0%に留まった。ブルネイの学校では、よく観るテレビ番組といえば、男子はサッカーの試合、女子はマレーシアのドラマや音楽番組であると述べている（外務省、online）。おそらくサッカー観戦しているリーグは、2012年に新たなリーグとしてこのブルネイ・スーパーリーグである。このリーグは、チームの能力やインフラを中心とした条件を満たした10チームが現在このリーグで戦っている。また、下位リーグであるブルネイ・プレミアリーグとの入替も実施されている。リーグ戦形式で行われ、勝ち点、得点数、失点数、勝利数の順に結果を利用し順位を決定している。また、ブルネイ DPMM は、他国のシンガポール・プレミアリーグ所属している。2019年、4年ぶり2度目の優勝が決まり、トロフィーの贈呈は、本拠地ハッサナル・ボラキア・スタジアムで行われる（TEN TEAMS TO BATTLE FOR BRUNEI SUPER LEAGUE IN DECEMBER、online）。これらのリーグ戦は、チケットを購入すれば自由にスタジアムで試合観戦ができる。このことから、ブルネイのサッカー環境下では、自然に試合を観戦できるリーグ戦が整っている。そのため、サッカー観戦のために、暫し競技場に行くほど関心度が高くなったと考えられる。

4.6. トレーニング回数

トレーニング回数に関しては、40.0%が「3回」であった。また、続く30.0%が「4回」と多く、平均3.65回であった。今回参加した選手は平均13.60歳（12～15歳）であり、JFA 指導指針の13～14歳時（週トレーニング4回とゲーム1回程度）の比較を行っても、大きな差は見られなかった（JFA、2017）。しかしながら、JFA 海外派遣サッカー指導者のブルネイ・ダルサラーム ユース育成担当（主にU-14からU-16のカテゴリーを担当）である埴田淳氏（以下：埴田コーチとする）によるとイスラム教徒にとっての断食月後は、日本人にとってのお正月やヨーロッパでのクリスマスと同じ意味合いを持つ。そのため、家族との時間を優先したいということから公式試合やトレーニング活動を辞退することもあり得ると述べている（JFA 公認指導者の海外派遣、online）。また、藤原監督は、サッカーは「娯楽」の感覚が大きく「競技」としての理解がまだ少ないのが現状である。ブルネイでの通常は、勉強に励み国民の7割が

公務員となって生涯安定に暮らすことである。ほとんどの保護者は「サッカーは勉強時間を削減する要因」と考えているため、時々トレーニングに参加しない選手も少なくないと述べている（JFA 公認指導者の海外派遣、online）。このことから、JFA 指導指針に沿ったトレーニング回数をこなしているが、サッカーに対する「娯楽」の感覚や勉強時間を削減する要因と捉える選手も多く、トレーニング回数にも大きく影響していると考えられる。

4.7. トレーニング時間

時間に関しては、63.2%が「60分」、21.1%が「90分」と多く、平均79.5分であった。今回参加した選手は平均13.60歳（12～15歳）であり、JFA 指導指針の13～14歳時（週4回+ゲーム1回560分、1回トレーニング平均93.3分程度）の比較を行っても、大きな差は見られなかった（JFA、2017）。しかしながら、埴田コーチによると実際のトレーニングにおいて、ブルネイには電車がなく、主な交通手段は車になる。公共のバスもあるが、ほとんどの保護者が選手の送り迎えをするのが通例になっている。そのため、交通手段がないと言ってトレーニングに遅れたり欠席したりする選手もしばしば見受けられるほどである。また、国教であるイスラム教と人々の生活の密接な関わりがある。1日5回の礼拝（スンバヤン）の時間があり、イスラム教徒への礼拝を呼びかける合図であるアザーンが鳴り始めるとトレーニングや試合がストップすることもあると述べている。このことから、指導者が上手くトレーニング時間を調整してJFA 指導指針に沿ったトレーニング時間をこなしているが、保護者による選手送迎や国教などによって大きく影響していると考えられる。

以上のことから、ブルネイの豊かな資源による国民の生活水準の安定は、日々の生活に追われるといった状況は想像しえないが、選手への目的意識や目標の設定をサッカーに携わるステークホルダーが後押しすることで、グラウンドで戦ううえで必要不可欠な「ハンガリー精神」を埋め合わせる事は可能である。ブルネイサッカーは、行政から現場まで一貫して巻き込む理念と構想をサッカー協会が示し、それを基に長期の事業計画として設計していく必要がある。さらに、それを短期的、現場レベルまで具体化し、ブルネイサッカー界が向かうべき道筋を各ステークホルダーに対し役割と分担を求め、行動し実行するべきである。

5. まとめ

本研究では、ブルネイサッカーアカデミークラブ選手の競技力に関する実態調査を行い、サッカーに対する志向や目標などを探索する基礎的研究を実施することを目的とした。その結果、以下の内容が得られた。

5.1. サッカーを始めた動機

サッカーを始めた動機に関しては、50.0%以上が「楽しそう」だからという内発的動機付けによってサッカーを始めたと考えられる。このことから、サッカーを始めた動機に関しては、大半の選手が普段通学している学校でサッカーを行っていることがわかった。また、ブルネイの選手は、「楽しそう」だからという内発的動機付けによってサッカーを始め、勉強熱心で向上心があると考えられる。

5.2. チーム以外でのトレーニング回数

チーム以外でのトレーニング回数に関しては、45.0%が「時々している」であった。また、30.0%が「いつもよくしている」、続く20.0%が「よくしている」と回答していた。このことから、ブルネイの選手は、選手の半数が、学校や国の施設などで普段からクラブのトレーニング以外でもトレーニングする機会があることがわかった。

5.3. トレーニングの楽しさ

トレーニングの楽しさに関しては、95.0%が「いつも楽しい」と回答している。また、続く5.0%が「楽しくない時もある」と回答していた。このことから、ブルネイ人にとって、サッカーだけでなくスポーツを実施する環境には非常に恵まれているため「楽しんで実施している」と実感していると考えられる。また、一方で、純粋にサッカーが楽しい、上手くなりたいと感じている選手に対して、「希望」を子供達に示すシステムと共に、それを実現しうる計画を必要であると考えられる。

5.4. サッカーにおける目標

サッカーにおける目標に関しては、上のレベルを目指したいという競技スポーツとしての選手での回答になった。「海外のプロサッカー選手になりたい」は、90.0%であった。このことから、所属しているクラブは、全国大会レベルであり、各年代の代表選手として海外試合経験も数多く存在している。そのため、自国よりも、もっとレベルの高い国でプレーしたいという気持ちが強くあると考えられる。

5.5. サッカーの観戦

サッカーの観戦に関しては、80.0%が「よく競技場へ観に行く」であった。「TVの試合をよく観る」「時々TVの試合を観る」は僅か5.0%に留まった。このことから、ブルネイのサッカー環境下では、自然に試合を観戦できるリーグ戦が整っている。そのため、サッカー観戦のために、暫し競技場に行くほど関心度が高くなったと考えられる。

5.6. トレーニング回数

トレーニング回数に関しては、40.0%が「3回」であった。また、続く30.0%が「4回」が多く、平均3.65回であった。今回参加した選手は平均13.60歳(12～15歳)であり、JFA指導指針の13～14歳時(週トレーニング4回とゲーム1回程度)の比較を行っても、大きな差は見られなかった(JFA, 2017)。このことから、JFA指導指針に沿ったトレーニング回数をこなしているが、サッカーに対する「娯楽」の感覚や勉強時間を削減する要因と捉える選手も多く、トレーニング回数にも大きく影響していると考えられる。

5.7. トレーニング時間

トレーニング時間に関しては、63.2%が「60分」、21.1%が「90分」と多く、平均79.5分であった。今回参加した選手は平均13.60歳(12～15歳)であり、JFA指導指針の13～14歳時(週4回+ゲーム1回560分、1回トレーニング平均93.3分程度)の比較を行っても、大きな差は見られなかった(JFA, 2017)。このことから、指導者が上手くトレーニング時間を調整してJFA指導指針に沿ったトレーニング時間をこなしているが、保護者による選手送迎や国教などによって大きく影響していると考えられる。

以上のことから、ブルネイサッカーは、行政から現場まで一貫して巻き込む理念と構想をサッカー協会が示し、それを基に長期の事業計画として設計し、ブルネイサッカー界が向かうべき道筋を各ステークホルダーに対し役割と分担を求め、行動し実行するべきである。

6. 今後の課題と展望

今回の調査によって、サッカー界においてのアジアから見る日本の立ち位置を確認することができた。また、それと同時に、アジア各国全体が、サッカーに対する考え方を

急速に発展していることも感じた。しかしながら、今回の研究結果は、限られたクラブと選手数に限定されており、ブルネイサッカー全体の状況を把握できたとは限らない。したがって、これまでのブルネイサッカーの状況の変化やアジア全体のサッカー事情をより深く研究するために他国での調査も継続して実施していきたいと考えている。

引用参考文献

ブルネイ・ダルサラーム国のサッカー

<http://dearfootball.net/article/228>(2020年6月10日参照)

独立行政法人日本スポーツ振興センター (2017) 平成 29 年度調査報告書 ASEAN 地域におけるスポーツニーズ調査研究フェーズ. 日本スポーツ協会. pp.175-187.

FIFA ランキング

<https://ffranking.net/nations/brn/> (2020年6月10日参照)

JFA 公認指導者の海外派遣

http://www.jfa.jp/social_action_programme/international_exchange/dispatch_member/ (2013年6月10日/2020年6月12日参照)

JFA ニュース

https://www.jfa.jp/social_action_programme/international_exchange/news/00015025/ (2020年8月11日参照)

松山博明, 関口潔, 須田芳正, 中村泰介, 土屋裕睦 (2017) 海外派遣サッカー指導におけるコーチング環境の実態調査-指導者の赴任動機から-.大阪成蹊大学紀要, Vol.1, No.3, 101-107.

松山博明, 松竹貴大 (2020) ブータンサッカーの育成年代の競技力向上に関する実態調査-ポストゴールデンエイジとゴールデンエイジに着目して-.ブータン学会, Vol.3, 13-24.

TEN TEAMS TO BATTLE FOR BRUNEI SUPER LEAGUE IN DECEMBER

<http://aseanfootball.org>. (2012年8月8日閲覧).

21 世紀東アジア青少年大交流計画 (2011) 2011 年度ブルネイサッカー派遣事業報告書, 2012 年 8 月 財団法人日本国際協力センター pp.1-19.